

金木の
かたがりべ

第15集



発行 わがふるさとを探る会



金木の かたりべ

〈表紙解説〉

嘉瀬の奴踊り

「嘉瀬と金木の間の川コ、石コ流れて木の葉コ沈む」

痛烈な風刺を込めた嘉瀬の奴踊りの歌詞である。

「石コ流れて木の葉コ沈む」とは、世の中逆さまだ、道理の通らない世相を正そうとする津軽農民の叫びを物語っているようだ。津軽四代藩主信政公が金木新田の開拓事業に着手したのは、元禄十二年（一六九九）で、宝永二年（一七〇五）にこの大事業の完成を見た。当時農民は、元禄五・六・七・八年と続いた大凶作で餓死者十万余人・空屋七千戸に達したといわれる。貧苦のどん底に落ち込んでいた農民は農奴として虐げられ、言葉に絶する苦難の労務であった。その抵抗の心が「嘉瀬の奴踊り」を生んだものと思われる。

尾張からの移民鳴海善右エ門の子孫伝右エ門の忠僕が、主人の不遇を慰めるために踊ったのが始まりとされる。

奴踊りの伝説も、前者を田主（太郎治）たあるじ）後者を弥十郎（やんじゅうろう）小作人の代表者）と見たてのことである。この弥十郎の奴踊りだけが、いつしか嘉瀬地方に残り、嘉瀬の奴踊りとして村民に受け継がれて現存し、この系統の踊りとしては本土の北限となり、また他に例のない動きをもつ特異な踊りとして尊重されている。昭和四十四年十二月一日に青森県無形文化財（技芸）として指定されている。

写真「斜陽館前での嘉瀬の奴踊り」

（木村）



巻頭言

発刊に寄せて



金木町助役 角田昭次

読んで面白く、見て楽しい、そしてタメになる。何も外交辞令で言っているのではない。「かたりべ」が手に入ると一気に読んでしまう。私はいわば真正正銘「かたりべ」の愛読者の一人なのである。

まず、内容がすばらしく、バラエティにも富んでいる。会の性質上、昔の事や古蹟の探求が中心となっているが、それだけに止まらず、随筆あり、回想記あり、文芸あり、笑話ありで、写真やカットも随所にちりばめていて退屈しない。また、執筆者が皆顔見知りなので親近感もある。

金木町には「短歌の会」、「俳句の会」、「川柳の会」、「太宰会」など沢山の文化団体があり、それぞれ活発に活動を

しているが、なかでも「わがふるさとを探る会」の実績はすばらしく、「かたりべ」は今回で十五集目となる。私は前々から、テレビの“なんでも鑑定団”の中島誠之助ではないが“いい仕事しているネエ”と思っていた。

過去を振り返ったり、歴史を学習するのは、ただ単に昔が懐かしいとか、好きだからと言う、いわゆる懐古趣味からばかりでなく、現在を理解し将来を展望する上で役に立つものが必ず存在するからだと思う。「温故知新」と言う言葉もある。古いものには人間の知恵や工夫が一杯詰まっている。会員皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

目次

表紙解説 木村治利

《巻頭言》 発刊に寄せて 角田昭次

組紐の歴史、時代の変遷とともに変わる 木村治利 1

権現崎徐福伝説とお岩木さん 山中長三郎 7

ドシ(癩病) 福部庵比佐伍 20

半世紀前の回想 秋元惣之進 23

寄稿 引き揚げ始末記 逢坂伸三 33

こんなことも(続・追憶太宰治断片記) 山中正津 36

文芸 俳句・短歌・川柳・詩 43

寄稿 夢・立ちづくす 折戸谷勉 54

わがふるさとを探る会二〇年の歩み 55

村の笑い話(六篇) 森平・やぶ野竹林

噛み合わず 協力 名医 54

チーン 横文字に弱い母親 鯉の餌 61

復刻版

組紐の歴史・時代の変遷とともに変わる

木村 治利

大手鉄鋼メーカーの新聞広告のキャッチフレーズに「もし、一本の紐がなかったら、人類は生き残れなかっただろう」とあった。

一個の石片と木の枝を一本の紐で、結ぶことで斧ができた。道具の誕生である。

組紐という紐作りに携わる者として、見逃がすことのできない言葉である。

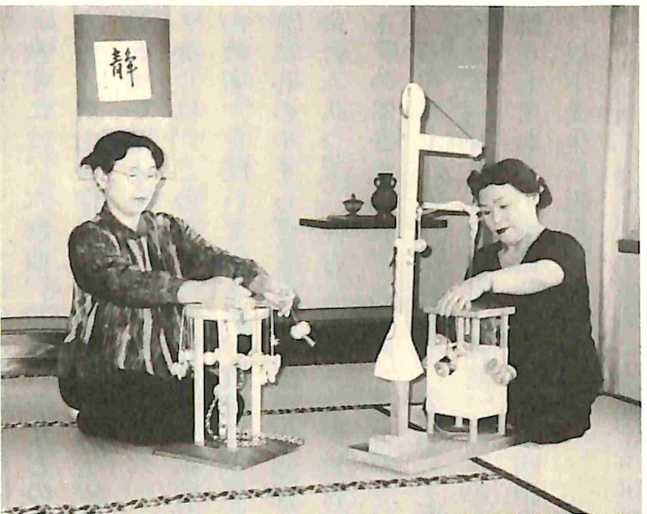
今年九月、金木町公民館グループ交流会で「組紐教室」の川口良子先生の講演を聞き、感銘を受けた。

組紐は、古代から存在し、その高度な色彩、配色と複雑な柄のすばらしきにとりつかれ、三十年程前からその技術を磨いてきたという組紐一級講師の川口先生である。

組紐は、毛糸や古着を裂いた布を材料に帯締を



高台(七十五)で組む川口さん



丸台(十六玉)で帯締を組む川口さん(左)
角台(八つ玉)は長利さん(右)

始めとして、インテリアグッズなどさまざまなものを作っている。

教室には、六歌仙、春夏秋冬などの帯締やカバン、ネクタイなど、沢山の作品が展示されていて、お祝いや、贈り物にも喜ばれているという。

先生は、このほか「長沼静香着物着付け、遠州流お茶やお花の教室」を開いているが、組紐の手作りのもつ素材さと、温かさに心のやすらぎを覚え、組紐の勉強をしたという。教室には角台（八つ玉）丸台（十六玉）綾竹台（三十二玉）高台（七十玉）の器台で「紐」「帯締」「カバン」等が組まれていた。

昭和五十五年「組紐教室」を開き、東京、京都で腕を磨いた。今では「NHK青森組紐教室」「エルム文化部組紐教室」の講師をしており、生徒数も現在まで四〇〇名を超えている。

以下先生に組紐の歴史を聞く。

紐の歴史について

遺跡から発見された縄文式土器には、縄目の文様の圧痕がみられる。このことから衣服の発生以前、人間が裸に近い状態で生活していた頃、すでに紐が人間の生活と深いつながりをもっていたことがわかる。

身にまとう獣の皮を縛ったり、採集、狩猟で得た食物を束ねたりするために使われていたのであろう。

センチ）くらいまでの平打紐で、この名が起ったのは、天正年間（一五七三〜九二）に真田氏が刀の柄糸として用いたのが始まりで木綿、山藪の糸及び絹糸を使用している。

羽織紐は各種用いられるが、大別して丸打と平打である。

丸打は四つ打、八つ打、十六打がある。

平打は真田打、綾打、籠打がある。

婦人用は昼夜打（平打、紐の表と裏の色が異なっているもの）や縫菜（七宝形の模様を織り出したもの）がある。

組紐とは

紐の一種・打紐ともいう。

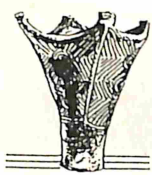
紐には、撚、編、組、裁、折、紵、束の七種の紐があるが、組紐はこの中で比較的、編紐と似ている。しかし編紐が篋を使った縦横の組織であるのちがって、組紐は繊維類をまとめて一単位ずつを、斜面交差させたり、あるいは前後、上下に交差密接させた細幅繊維製品である。

そして、その方法形態によって、丸紐と平紐に分け、更に組紐単位を一手又は一玉といい、簡単な三つ紐、四つ紐（三つ打、四つ打ともいう。一打とは紐を組む動作から出た言葉）から始まって、複雑な組紐になると七十玉から一〇〇玉におよぶも

当時の紐は、樹皮をさいて作ったものか、植物の茎を編んだもの等と思われるが、果してどんな「結び」をしたものか。

土中から発掘される人物埴輪の衣装に数多くの紐が使われている。胸元の飾り紐、腰のあたりを縛っている紐、男の禪のひざのところをくくっている紐等である。

即ち時代の変遷とともに、紐の用途が多様化し、実用的な面に美的、装飾的な要素が加わってくる。



縄文式土器



埴輪



束帯

紐にはどんな種類があるのか

糸又は布ぎれを組んだり、編んだり、縫い合わせたりしたもので、ある程度の太さ、又は幅をもった紐で長いもの。

古く緒といわれていたものは、この種のものと考えられる。

紐の種類に打紐、組紐、編紐の三つの代表的な作り方のほかに、袋状紐と固着紐とがある。

袋状紐は布を袋状に縫った紐。

固着紐は数本の糸を揃えて、のり料で固着させた紐。

打紐は平打と丸打とがあり、帯留の紐には打紐が多い。

真田紐は幅二分（約〇・六センチ）から一寸五分（約四・五

）のものもある。

名称は新羅組、丸源氏打、高麗打、その他二〇〇種近い組方や名称がある。

材料は絹糸がおもで、木綿、麻等も用いられ、又、それらの材料を混ぜ合わせることもある。

用途は武具、甲冑、刀剣、馬具、弓具。

神具は経巻や絵巻、幡飾、華鬘等の荘厳具。

工芸品は箱、記帳、二階棚、額、楽器等の付属品。

装飾品は帯留、その他古くから用いられてきた。

組紐の歴史

一、縄文時代（九千年前〜紀元前三世紀頃）

縄文土器の文録や埴輪、土偶等から、当時紐が使われていたとみられる縄目文をつけた土器を使っていた時代である。

○縄目文をつけるための紐には撚り紐と組紐とがあった。

○組紐には、さらに二種類があり、四本の糸を用いた丸紐と、三本の糸を用いた平紐がある。

組紐の痕跡が残っているのは、古墳時代（四〜七世紀）である。

○古墳出土の人物埴輪には、胸の紐、禪の脚帯等がみられる。

又、鎧には緞紐にも組紐が残っている。角紐（角八つ組）もみられる。

二、飛鳥・奈良時代（五九二～七八四）

飛鳥時代から奈良時代に、組紐の革命が起こった。中国や朝鮮から高度な色彩と複雑な柄のすばらしい組紐とその技術が伝えられたからである。

法隆寺には、聖徳太子（五七四～六二二）がつけていた剣の帯と同じ品と思われる唐組の組紐残片がある。

このように精緻な美をもつ組紐やその技術の影響を受けて、我が国の原始的な三つ組、四つ組の紐も、ぐっと高度化し、立派なものが作られるようになった。

単純な三つ組でも、玉数をふやしてゆけば、巾の広い安田組（新羅組）ができ、安田組の組織を二本交差させると、高麗組ができる。

三、平安・鎌倉時代（七九四～一三三三）

平安時代（七九四～一一八四）に入って、我が国独自の優麗典雅な組紐工芸が完成された時期であり、当時の技術が今日に至っている。

特に、平安後期には、優雅な貴族文化の華が開き、武士が登場してきたことから組紐の装飾性が強まった。武器、荘厳具、服飾、工芸と幅広く用いられた。

鎌倉時代（一一八五～一三三三）は武家社会の時代であ

り、鎧は最盛期を迎えた。鎧には緞の紐をはじめ、繰締め

の紐等多くの組紐が使われている。

その中心は緞紐で、これを緞毛おどしけという。緞し方は「紅梅」「萌黄匂ももたにおい」「紫裾濃むらさきすそこ」「沢瀉おもたか」「色々緞いろろおどし」等十種類の方法があったといわれる。

鎧の中でも鎌倉時代の大鎧がもっとも多くの組紐を使っている。実に華麗で、武器というより美しい工芸品である。

我が国に現存する組紐の中で、もっとも緻密で複雑な組織をもっており、実に精巧に組まれている。従って手間ひまも、かかり、その組む時間は丸源氏組のおよそ一〇〇倍といわれる。

四、室町時代（一三三三～一五七三）

室町時代は鎌倉時代の「組紐の黄金期」に比べると量産の時代といわれる。

この時代、組紐の需要は、貴族社会、武家社会、社寺、そして庶民へと広がった。特に発達したのが茶道で愛用された。

室町中期応仁の乱（一四六七～七七）を境に戦国時代の世となる。組紐の需要が増えた理由は、甲冑・太刀等の武器の付属品としての紐が多量に必要となった、丈夫な紐ということから、丸源組が考案された。

五、安土・桃山時代（一五七三～一六〇〇）

安土・桃山時代は美術、工芸、茶道の盛んな時代で、豊臣秀吉（一五三八～九八）は、中国から工人を呼んで工芸を奨励した。このため、組紐も戦国時代の実用的なものから、装飾的なものへと変化した。

又、この時代「名護屋帯」という組紐で作った帯が生まれた。

肥前（現在の佐賀県）の名護屋という所で作られたので、この名称となった。

秀吉が朝鮮侵略のとき、この名護屋に陣屋を置いたので、朝鮮から多くの工人が連れてこられ、ここで韓組かんぐみ（唐糸を用いた組紐）を作りながら技法を伝えたのが始まりで、「韓組帯」とも称された。

名護屋帯は丸八つ組が十六組の紐で、長さは五メートルくらいである。

六、江戸時代（一六〇三～一八六七）

江戸前後は、町人文化も栄えたが、武士の力は絶大であった。

組紐も、太刀、脇差の下緒、柄巻系つかまき、刀袋の房等、武士の使用量が圧倒的に多かった。このため、組紐職人が江戸に集中した。そして組紐、羽織紐、帯締め、文箱の総、鏡台の飾り絵、襖の飾り、手提袋の緒、髪飾りの緒と、用途

が広がり、庶民の需要も次第に増えていった。

刀や鎧の紐の修理は、武士が自分でやるようになり、組台は「高台」と「内記台」が考案された。

高台は、大きな台で綾出しの技法を用いて文字や紋所を組み出せるようになった。

内記台は、歯車を用いた半自動式の組台である。組紐が帯締めや、羽織紐に用いられたのは、江戸時代末期である。

文化十四年（一八一七）江戸亀戸天神の太鼓橋が完成、その渡りぞめに深川芸者が太鼓橋に似た帯結びをした。現在の太鼓結びの始まりである。とけやすいので、丸紘の紐を締めた。

これが帯締めの始まりである。

組紐は太古からの贈り物

それぞれの時代に、さまざまな人の生き方を脇役として支えてきた組紐、たいへんな時間と労力を費やしたことであろう。

複雑で美しい紐を見ていると、時間さえ今よりずっとゆとりと流れていたのではないかと思えるし、作る人・使う人、それぞれの物に対する執着心の違いをも感じるのである。

今、名品のいくつかは帯締めやアクセサリーに姿をかえて組み継がれているが、かつてのような作品の生れることはないので